

■美的に見える“かたち”について

では、具体的に『美的に見える“かたち”と“いろ”』とはどういうことなのか。特にかたちを感じる感覚というのは五感に通じてまして、姿・格好、うわべの形、の“かたち”ですね。それからもうひとつは色彩も入ってきます。色彩現象によってかたちを認識するんですね。それから材質・材料ですね。ガラスとか繊維、鉋物とかによって見る側の捉える感覚が違います。それから肌理（キメ）、テクスチャー（texture）のことですね。人間の皮膚の表面の網膜状のパターンをテクスチャーと言いますが、その感覚でものをいろいろと感じているということになります。そして光の現象。これは舞台演劇やテレビのショーなどで一番効果的に見せているものです。今は上方から光が入っていますから、みなさんの目にも私の顔がきれいに映っているわけですが、この光が下方から入りますと、ちょっと異様な感じになったりするわけで、お化粧屋敷やその他で表現されているテクニックになります。そういう光の現象で、同じかたちのものであったとしても全然違う感じに見えるということです。また物体が動いている状況では、どんなに固い物も、四角い物も、刺々しい物も、あるスピードで移動しますと、それが丸状に見えたりするというようなことがあります。以上のように、かたちを認識するには6つの条件があるということです。これを私達は意識することなく感じているわけです。かたちは、意味づけとしては形、容姿の容という字も書きますし、それから五感で感じる感覚、テクスチャーもそうですが、視覚、触覚で捉えるものがあるということです。外見に現れた姿格好、中身はともかくというような但し書きがついてよく皮肉っぽく言いますが、中身や働きに対して、今申し上げた外形、形式、それから様子ですね。顔立ち・容貌・容姿とか、これはいっぱい表現がありますが、こういうことで私達はかたちを捉えています。

今朝、みなさんですと家庭で家族のために食事を調べてこられた方もいらっしゃるかと思いますが、食べるとか、おいしいということを除いて、美的に見えるものを古代から研究している中でよく使われる言葉に“形式原理（principles of form）”という言葉があります。これは対象が目に見えている状態で、そのものが美しいかどうかの基準のことで、内容とか目的は除外しています。例えば“大根の煮付け”などという意味ではなくて、大根が丸ければ“円形の”という、そういうことです。“美についてのみの形式的条件のこと”ということですから、幾何学的な図形の組み合わせで美的に感じる感覚とっていただければいいと思います。

“美”は統一(unity)と変化(variety)の適当なバランスを条件として、両者の多様性と秩序性が美的かどうかの基準になり、統一しているものを“美”に感じ、不統一は“醜”というふうに私達は判断しています。対象が統一され、統一は多様性を含む必要がある。例えば、入学式などの式典であれば整然としています。整然とした中で一人がちよっと違う格好をしているとすごく目立ちます。そのバランスで判断をしています。一方、整然としたものだけ見せられていると人間は満足しませんので、飽きてきて違うものを求めることもあります。そのバランスがそのときの条件によっていろいろ織りなすことが美的状況の難しさでもあるし、また変化の面白さにもなるかと思えます。対象は矛盾があってはならない、矛盾があると快適に結びつかない。式典で整列するということが最も良い例だと思います。また、対象は明確でなければならない。これは、食で表現するなら、盛り付けや

テーブルコーディネートで、ひとつのスタイルにまとまって表現していることをいいます。この形式原理で生まれた言葉はたくさんあり、その中で総称した意味（大分類）になるのは“統一(unity)”です。統一感があればまとまって見えて、それが整えられて美しく感じるといえることですね。

それからもう少し具体的（中分類）になると、“調和(harmony)”と対比(contrast)です。調和のかたちって言われてもすぐに答えは出ないと思います。調和がある感覚というのは、実は“対比(contrast)”の組み合わせのバランスの感じでもあります。それぞれには言葉の意味がありますが、いろいろな形式を研究することで、こういう言葉が美を整えるときのひとつの方法として使われています。ファッションではよく使われております。

個別（小分類）では主に、“反復(repetition)”と“交替(alternation)”です。これは洋服の柄とか、男性であればネクタイなどの柄が繰り返しの柄になっていたりを見ることができます。昼と夜、潮の満ち引きとか、それから映画や演劇などは幕間などがあります。そういう繰り返しが反復と交替です。次は“律動(rhythm)”。形式原理の中で唯一時間感覚が入った言葉です。これはさっきの反復とか交替と似ていて、そのような現象をリズムと言います。時間の変化を入れて説明できるものです。それから“漸移(gradation)”。グラデーションというとおわかりだと思いますが、だんだんと変化することです。これは最もよく知られている言葉だと思います。それから“対称・均斉(symmetry)”という言葉があります。ヨーロッパのゴシック様式は左右対称の美ということで、ヨーロッパの造形を象徴するひとつの形でもあります。もうひとつは“非対称(asymmetry)”。これは日本人が最も好む美のかたちと言われています。生け花ですとか床の間飾り、それから服飾、女性の襟合わせのスタイルとかをよく見ると、実は全く左右対称ではないけれど左右対称形に感じる造形になっています。それから“均衡(balance)”。これは見た目のバランスですので、もちろん個人差があると思います。あとはファッションで使われますが、“比例・比率(proportion)”。8等身とか7等身が美人だと、それは人間がつけたひとつの理屈でありませうけれど、そういうことよりもバランスがとれていることの見方としてプロポーションがあります。以上のような言葉がありますが、これを決めつけて使うことが決して良いことではないとは私は思っています。吟味するときこの条件を使うと、迷っていたもののある程度整えることができるという効果があるかと思えます。

それから“図形(figure)と地(ground)”というものがあります。略して“図と地”と言います。これは都市計画などでもよく使われている専門用語でありますけれど、どんなものかということのをこれから説明したいと思えます。かたちには浮き上がって見える“図形”と、それを強調して引き立てる背景となり、周囲の空間となる“地”があります。“地”は形を持ちません。みなさんポートレートを撮ったときに顔立ちとかを一生懸命見たりしますが、実は背景とのバランスでものを見ているんですね。背景の効果をあまり意識することはないと思いますが、図形はシンボリックなものと考えたら良いと思えます。これらは刺激条件、観察者の経験、それからじーっと見ているか、単に見過ごしているかということもありますけど、個人によってものすごく変わります。有名なものにルビンの壺というものがあります。コマーシャルにも使われたりしておりますが、壺や人の顔に見える反転

する図形です。壺と見えた人は、左右の形の顔を意識して見ると壺が消えていくと思います。パッと見て2つの顔が向き合っているように見えると壺が意識されませんね。その見る条件によって壺に見えたり、顔が向き合っただけで見えたりするのがルビンの壺です。このような研究を専門にしている人がいっぱいいるわけです。美は決めつけるものではないということだけは、これで理解していただけたのではないのでしょうか。ただ、それを感じたとき、人に伝えたいときには、よく伝えるためにはどうするかというときに吟味するものとして言葉があります。

以上、見えるものの状況から、人間は主観的に誘導されて見える形があるということを言いましたが、例えば、図1は真ん中の線が切れている部分に曲線が見えると思います。図2はどうですか？3つの点を結ぶような逆三角形が見えたのではないかと思います。このように線はないのですが、見る人の視覚が形を主観的に誘導しているといえます。したがって、かたちは見方によって一様ではないということです。実際にこういうものをプロとして表現したり、それから実際の生活の中では、みなさんであればお子さんとコミュニケーションするときに、かたちの状況で印象が変わったりもするという意識をもつものを整えていくということが大事な条件になります。

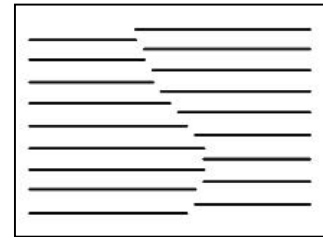


図1

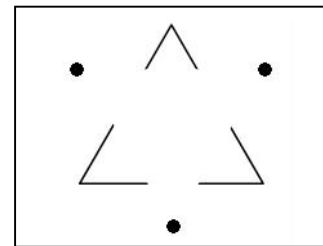


図2